

国立医薬品食品衛生研究所報告への投稿について

投 稿 規 定

1. **投稿資格**：国立医薬品食品衛生研究所所員とする（共著者はこの限りでない）。
2. **内容**：原稿は、特論、総説、原著論文、ノート、資料、ステートメントとする。そのほか業務報告、誌上発表、単行本、行政報告、学会発表、レギュラトリーサイエンス関連会議報告などを収載する。
 - 特論**：国立医薬品食品衛生研究所の研究業務に関連する主題について、ある特定の視点から系統的に整理・論述したもので、編集委員会が執筆を依頼する。
 - 総説**：数年以上にわたって行われた著者自身の研究や調査を中心にして、特定の主題について包括的・系統的に総括したもので、投稿により受理する。
 - 原著論文**：独創的な内容や新知見を含んだ研究成果をまとめたもので、投稿により受理する。
 - ノート**：断片的ではあるが独創的な内容や新知見を含んだ研究成果を報告するもので、投稿により受理する。
 - 研究に関する資料**：試験、製造又は調査などで、記録しておく必要のあるもので、投稿により受理する。
 - 標準品に関する資料**：標準品に関する試験、製造又は調査などで、記録しておく必要のあるもので、投稿により受理する。
 - ステートメント**：レギュラトリー関連学会などで発表した内容の報告で、投稿により受理する。
 - 業務報告**：所長、各部長（支所も含む）及び各薬用植物栽培試験場の長が過去1年間（前年度）の業務成績、研究業績をまとめた報告。
 - 誌上発表**：国立医薬品食品衛生研究所報告以外の専門誌に発表したものの報告。
 - 単行本**：単独又は共同で執筆し、刊行されたものの報告。
 - 行政報告**：行政の依頼により実施し、報告書を提出したものの報告。
 - 学会発表**：学会で講演したりポスター発表したものの報告。
 - レギュラトリーサイエンス関連会議報告**：レギュラトリー関連会議内容の報告。
3. **用紙及び枚数の制限**：原則としてA4用紙（26字×24行）を用いる。原稿の長さは表、図、写真を含め刷り上がりページ数で下記の規定に従う（日本語の場合、刷り上がり1ページはA4用紙（26字×24行）で約4枚に相当する）。
 - 特論**：原稿を依頼するとき別に定める。
 - 総説**：刷り上がり15ページ以内。
 - 報文**：刷り上がり8ページ以内。
 - ノート及び資料**：刷り上がり5ページ以内。
 - ステートメント**：刷り上がり2ページ以内。
 - 業務報告**：各部及び各薬用植物栽培試験場について刷り上がり2ページ以内。
 - 誌上発表**：一題目について要約部分が26字×20行以内。
4. **原稿の提出**：原稿はワードプロセッサで作成する。特論、総説、原著論文、ノート、資料、ステートメントでは、表紙（第1頁とする）、英文要旨及びキーワード、本文、文献、図の表題と説明、表の表題と説明、図、表、英文要旨の和訳（参考）の順に通し頁番号を付け、左上をひもなどで綴じて提出する。表紙には、論文タイトル、所属、著者名に加えて、右上部に該当する分類（特論、総説、原著論文、ノート、研究に関する資料、標準品に関する資料、ステートメントなど）を、また右上部に総頁数及び図表のそれぞれの枚数を記入する。

提出部数は、特論、総説、原著論文については3部（オリジナル原稿1部及びコピー2部）、また、ノート、資料、ステートメントについては2部（オリジナル原稿1部及びコピー1部）とする。業務報告などの報告類については、オリジナル原稿1部とする。

原稿とは別に、原稿の内容（表紙、英文要旨、本文、文献、図の表題と説明、表の表題と説明など）の入ったフロッピーを添付する。フロッピーのフォーマットなどについては、その年度の「原稿募集について」に従う。

原稿とフロッピーには所長宛の報告書を添えて、定められた原稿締め切り期日までに編集委員（図書

係)宛に提出する。

5. **原稿の審査**：原稿の採否及び分類は、編集委員会が選んだ審査員（特論，総説，原著論文については2名，ノート，研究に関する資料，標準品に関する資料，ステートメントについては1名）の意見に基づき編集委員会が決定する。また，必要ならば字句や表現の訂正，図表の書き直しなどを求める。

執 筆 規 定

1. **文体，用語**：常用漢字を用い，現代かなづかい，新おくりがなの，口語文とし，簡潔で理解しやすい表現にする。全文を英語で書いてもよい。
原稿の語句の統一を計るため，おくりがな，かなで書くもの，文字の書き換え並びに述語などについては，原則として文部省用字用語例及び文部省公用文送りがな用例集に従う。（参考：国立医薬品食品衛生研究所報告記載の手引き（用語例））
なお，学術用語については文部省学術用語集（化学編，植物学編，動物学編，数学編及び物理学編など）に従うことを原則とし，用語集にないものについては学会の慣例に従う。
2. **物質名，化学名**：文中では物質はその名称を漢字，カタカナあるいは英語（アルファベット）で記し，化学式は用いない。例えば塩酸と書き，HCLとしない。英語で書く場合，文中では原則として小文字で始める。
3. **単位，記号，略号，略記**：単位は原則として国際単位系（SI）を用いる。（参考：国立医薬品食品衛生研究所報告記載の手引き（単位，記号，略号））
数字と単位記号の間は，必ず1文字あける。
また，物質名あるいは分析法などを略記するときは，和文，英文とも最初は正式な名称とともに示す。例えば，イソニコチン酸（INA），示差熱分析法—ガスクロマトグラフィー（DTA - GC）と書き，（以下INAと略す）などとししない。
4. **句読点**：，．を用い，、。としない。
5. **数 字**：算用数字（アラビア数字）を用いる。千の単位にコンマを付ける。また，必要に応じてローマ数字を用いることができ，慣用語などについては和数字を用いる。（例：一般，二酸化イオウ）
6. **繰り返し符号**：「々」，「ゝ」，「ゞ」は，原則として用いない。ただし，慣用語は用いても差し支えない。（例：徐々，各々）
7. **字体の指定**：文字の下に赤で次のように記す。
ゴ シ ッ ク 体~~~~~例：見出しなど 試薬
イ タ リ ッ ク 体—————例：学名など Papaver somniferum L.
スモールキャピタル—————例：著者名など L-ascorbic acid
8. **特論，総説，原著論文，ノート，資料，ステートメントの記載要領**：
 - 8.1 **記載順序**：8.2～8.8の順に書く。
 - 8.2 **題名，著者名**：次の例に従い，表紙（用紙1枚全部）をこれに当てる。なお，所外の共著者の所属は著者名の右肩に*（複数のときは*¹，*²．．．）のように記して脚注とする。
例：医薬品の確認試験法に関する研究（第2報）
鎮痛剤のクロマトグラフィー
用賀 衛[#]・世田 一郎・東 京子
Studies on the Identification of Drugs II
Chromatographic Methods for the Analgesics
Mamoru Yoga[#], Ichiro Seta and Kyoko Azuma
また，著者の中の一人を，連絡者（contact person）に指定し，著者名の右肩に#印を記して脚注とする。
脚注例：[#]To whom correspondence should be addressed:
Mamoru Yoga ; Kamiyoga 1-18-1, Setagaya, Tokyo 158,
Japan ; Tel : 03-3700-1141 ext. 200 ; Fax : 03-3707-6950;
E-mail : mamoru@nihs.go.jp
 - 8.3 **英文要旨**：論文の内容を400words程度で簡潔にまとめる。なお，参考のため和訳を原稿の最後に別紙として付け

る。

8.4 キーワード：キーワードは英語（必要に応じ，ラテン名）とし，選定数は5個以内とする。

英文要旨のあと2行あけて“**Keywords:**”の項目を付ける。固有名詞，略語を除き，小文字で記す。各キーワードはカンマで区切り，続けて記載する。単語，句，略語のいずれを用いてもよい。特殊な場合（例：tablets）を除き，単数形とする。また，冠詞はつけない。

8.5 本文：新しいページから書き始める。本文のスタイルは特に規定しないが，内容の重複を避ける。図又は表がある場合，それらの挿入位置を本文の左側の空欄に明記する。

8.6 文献：本文の引用箇所の右肩に^{1), 2), 3), 2-5)}のように記し，終わりに文献として引用順に書く。雑誌名はChemical Abstracts及び日本化学総覧の略記法による。外国雑誌名はイタリック体，巻数はゴシック体で表し，単行本は書名を省略せず，編者名や出版地も記載する。

例：

1) Ito, A., Suzuki, B, Tanaka, C. and Kato, D.: *J. Health Sci. Review*, **7**, 1234-1245 (1997).

2) a) Yamada, E. and Takahashi, F.: *Health Sci. Lett.*, **8**, 2345-56 (1996); b) Saito, G., Kimura, H. and Inoue, I.: *Health Science Bull.*, **123**, 3456-67 (1995); c) Ogawa, J.: *ibid.*, **124**, 12-25 (1996).

3) House, J.K.: "Recent Health Science," 2nd ed., eds. by Morrison, L. and Benjamin, M, Eiken Press Inc., Tokyo, pp. 123-234 (1997).

4) 衛研一郎，厚生花子：衛研雑誌，**234**，456-467 (1990).

5) 東京子，用賀太郎：衛研報告の書き方，衛研出版社，東京，pp. 234-456 (1997).

8.7 図：図 (Fig.) は原則として提出された原稿を70%縮小してそのまま掲載するので，本文とは別に各々一つずつをA4用紙世上に黒で鮮明に作成する。図の作成に際しては刷り上がり一段（幅84 mm）か二段（幅175mm）かを考慮し，刷り上がり一段の場合には原図幅120mm，二段の場合には原図幅250mmに収まるようにする。図には通し番号を付ける (Fig. 1., Fig. 2., . . .)。図の表題，説明は原則として英語で書く。図番号，表題，説明は，別のA4用紙にまとめて書く。なお，表題は大文字ではじめ最後に「.」を付けない。

例：Fig. 1. Influence of enzyme concentration on reductive suger production

Fig. 2. Reaction of ephedrine and pseudoephedrine with acetone as a function of time

図中の文章は，原則として英語で書き明朝タイプの書体（70%縮小されたときにも読みやすい大きさの文字）を使用する。図に写真を用いる場合には，鮮明に印刷されたものを使用する。用紙の裏には，論文のタイトル，著者名，図番号及び刷り上がり段数（一段又は二段）を黒鉛筆で記入する。また，本文の左側の空欄に図の挿入位置を記入する。

8.8 表：表 (Table) は，本文とは別に各々一つずつをA4用紙の上に作成する。表の作成に際しては刷り上がり一段（幅84 mm）か二段（幅175 mm）かを考慮する。

表には通し番号を付ける (Table 1., Table 2., . . .)。表の表題，説明は原則として英語で書く。なお，表題は大文字ではじめ最後に「.」を付けない。

例：Table 1. Classical transgenic mice and carcinogenicity

表中の文章は，原則として英語で書く。表中の項目に関する注は項目の右肩に^{a), b), . . .}の様に記して示す。

例：a) Gonodotoropine releasing hormone

表は，図と同じように活字の版組をしないで提出原稿をそのまま掲載することも可能である。その場合には，できるかぎり明朝タイプの書体を用いて作成し，鮮明に書き出したものを提出する。表の中に構造式や数式が含まれていたり表の構成が複雑な場合には，そのまま掲載できるような原稿が提出されるのが好ましい。用紙の裏には，論文のタイトル，著者名及び刷り上がり段数（一段又は二段）を黒鉛筆で記入する（活字の版組をしないでそのまま掲載されることを希望する場合には，その旨も書き加える。）。また，本文の左側の空欄に表の挿入位置を記入する。

9. ステートメントの執筆上の注意：投稿内容が，レギュラトリーサイエンス関連学会などで既に発表したものである場合には，脚注に例として「本ステートメントは，日本薬学会第117回レギュラトリーサイエンス討論会（1997.4, 東京）にて発表した内容をまとめたものである」との説明を加える。

10. 誌上発表などの記載要領：誌上発表，単行本，行政報告，学会発表については，別に定める記載要領及び例示に従う。

校 正

初校は著者が行う。人名，化学名，数値，文献などは特に綿密に校正する。内容の追加，行数の増加は認めない。

平成10年10月

国立医薬品食品衛生研究所図書委員会

国立医薬品食品衛生研究所報告記載の手引き (用語例)

注：送りがなについて_アンダーラインは注意して送るもの、□印は送らないもの。

*印印は特定のものを指すときは漢字でよいもの。

分類	用語	使う字	使わない字	備考	
ア	あかるい	明るい	明い		
	あきらかに	明らかに	明かに		
	あげる	上げる	上る		
	あたためる	→加温する			
	あたる	当たる	当る		
	あたらしい	新しい	新 [□] しい		
	あてる	当てる	当る		
	あつかる	扱う	扱 [□] う		
	あつめる	集める	集る		
	あらかじめ	あらかじめ	予め		
あらたに	新たに	新 [□] たに			
あらためる	改める				
あらわす	表(現)す	表(現)わす 表→表面に出し示す。著わす 現→かくさずに示す			
あらゆる	あらゆる	全る			
ある	ある	在る, 有る			
あるいは	あるいは	或は			
あわ	あわ	泡			
あわす	合 [□] わす	合す			
イ	いう	いう	言う		
	いくぶん	いくぶん	幾分		
	いづれ	いづれ	何れ		
	いちじるしい	著しい	著 [□] しい		
	いっかねん	一カ年	1箇年, 一ケ年		
	いっそう	一層	いっそう		
	いったん	一端	いったん		
	いって	いって	行って		
	いる	いる	居る		
	いる	入る			
いれる	入れる	入る			
いわゆる	いわゆる	所謂			
ウ	うしなう	失う			
	うすい(物)	薄い	薄 [□] い		
	うすい(色)	うすい			
	うすめる	→希釈する	薄める		
	うちに	うちに	内に, 中に		
	うながす	促す	促 [□] す		
	うる	うる	得る (can or may) →える		
	うるおす	潤す	潤 [□] す		
	エ	えがく	描く	画く	
		えらぶ	選ぶ		
える		得る	(get) →うる		
オ	おいて	おいて	於いて		
	おおう	覆う	被う		

分類	用語	使う字	使わない字	備考
オ	おおきい	大きい	大い	
	おおむね	おおむね	概ね	
	おこなう	行う	行 [□] う	
	おこる	起 [□] こる	起る	
	おそらく	恐らく		恐れ, 畏れ
	おそれ	おそれ		おだやかに
	おだやかに	穏やかに		落し
	おとし	落 [□] とし		おのおの
	おのおの	各々		自ら
	おのずから	おのずから		
おびる	帯びる		おもな	
おもな	主な		凡そ	
およそ	およそ			
および	及び			
おわる	終 [□] わる		終る	
カ	かえす	返す	返 [□] す	
	かえって	かえって	却て	
	かかわらず	かかわらず	拘らず	
	かける	欠 [□] ける	欠る	
	かさねる	重ねる		且つ
	かつ	かつ		かつ色
	かつしよく	褐色		必 [□] ず
	かならず	必ず		兼る
	かねる	兼ねる		
	～から	〇〇から作る. △△から再結晶 よりは使わない		
がらす	ガラス		硝子	
かわる	代 [□] わる		代る (代理・代人など)	
かわる	変わる		変る(うつりかわる, 変化)	
カ月	カ月		箇月	
10カ所	10カ所		10ヶ所, 10箇所	
キ	きしゃく	希釈		
	きめる	決める	決る	
	きりあげ	切上げ	切りあげ	
きわめて	極めて	きわめて		
ク	くふう	工夫	くふう	
	くらい(助詞)	くらい	位	
	くらべる	比べる	比る	
	くりかえす	繰 [□] り返す	繰返 [□] す	
	くみあわせ	組合せ(名詞) 組み合せ(動詞)		
ケ	けんだく	懸濁	けんだく	
コ	こえる	超える	越える	
	こげる	焦 [□] げる	焦る	
	ここ	ここ	此处	
こころみる	試みる	試る		

分類	用 語	使 う 字	使わない字 備考
コ	こたえ こたえる こと ごと ことなる ことに この こまかい (洗い) こむ これ これら	答え こたえる こと ごと 異なる 殊に この 細かい (洗い) 込む これ これら	答(表中) 応える 事* 毎 異なる 此の 細かい 之 此等, これ等
サ	さきに さける さげる さしこむ さしつかえない さまざま さら さらに	先に 避ける 下げる さし込む 差し支えない 様々 皿 更に	さきに 避る 下る 挿し込む(挿入) 差支えない さら
シ	しかし しがたい しげき したがう したがって したのち(に) しばしば しぶい しまう しめす しめる しゃこう しやすい しゅうまつてん じゅうぶん しょうじる じょうりゅう じよじよに しらべる	しかし し難い 刺激 従う したがって(接 続詞) 従って(動詞) した後(に) しばしば 渋い しまう 示す 湿る 遮光 しやすい 一終点 充分, 十分 生じる 蒸留 徐々に 調べる	然し, 併し, 而し 刺戟 したがう 屢々 しぶい 終う, 了う 湿 _ぬ る しゃ光 し易い, 仕易い 終末点 じゅうぶん 生ずる 蒸溜 調る
ス	すくない ずつ すてる すでに すなわち すべて すみやかに	少ない ずつ 捨てる 既に すなわち すべて 速やかに	少い 宛 捨る すでに 即ち 総て, 凡て, 全て すみやかに
セ	せん せんじょう	栓 洗淨	せん, セン 洗滌
ソ	そう そうにゅう そこ その そのほか	沿う 挿入 そこ その そのほか	そう入 其処 其の 其の他

分類	用 語	使 う 字	使わない字 備考
ソ	それぞれ	それぞれ	夫々
タ	だいたい たいてい たえず たがいに たしかめる だす ただ ただし ただちに たとえば ために	大体 大抵 絶えず 互いに 確かめる だす ただ ただし 直ちに 例えば ために	だいたい たいてい 絶えず たがいに 確める 出す 唯, 只 但し 直に たとえば 為に
チ	ちいさい ちがづく ちようど ちよっと	小さい 近づく ちようど ちよっと	小さい 近づく, 近づく 丁度 一寸
ツ	ついて ついで づつ つぎに つくる つける つめる つねに	ついて 次いで ずつ 次に 作る 付ける 詰める 常に	就いて, 付いて 宛 つぎに
テ	ていする できる	呈する できる	出来る
ト	とおり とき ときどき とくに どこ ところ ともせん ともなう ともに とりあつかい	とおり とき 時々 特に どこ ところ 共栓 伴う 共に 取扱い(名詞) 取り扱い(動詞)	通り 時* ときどき 何処 所* 共せん 伴 _あ う
ナ	ないし なお なかば ながら なづける など ならびに なるべく	ないし なお 半ば ながら 名付ける など 並びに なるべく	乃至 尚 中ば 乍ら 名づける 等 成べく, 成る可く
ニ	にかわじょう にごる にそう にゅうばち	にかわ状 濁る 二層 乳鉢	膠状 2層 乳ばち
ヌ	ぬぐう ぬらす	ぬぐう ぬらす	拭う 濡らす

分類	用 語	使 う 字	使わない字 備考
ネ	ねんちゅう	粘稠	
ノ	のぞく のちに のべる のり	除く 後に 述べる のり	のちに 述る 糊
ハ	はかり はかる はじめて はじめの はじめる はやい	はかり 量る 初めて 初めの 始める 速い	秤 測る, 計る →当用漢字 初て
ヒ	ひとしい ひとつ ひとつづつ	等しい 一つ 一つづつ	
フ	ふきん ふくざつ ふたたび ふりまぜる ふれる	付近 複雑 再び 津り混ぜる 触れる	附近 振混ぜる 触る
ホ	ほか ほど ほとんど ほほ	ほか ほど ほとんど ほほ	他, 外 程 殆んど 略々, 略ほ
マ	ますます まぜあわせ まぜる また または まだ まったく まで まま	ますます 混合せ(名詞) 混ぜ合せ(動詞) 混ぜる また 又は まだ 全く まで まま	益々 混る 又, 亦, 復 未だ 迄 儘
ミ	みたす みとめる みなす	満たす 認める みなす	満す, 充たす 認る 見なす, 見做す
ム	むしろ むずかしい むすぶ	むしろ 難しい 結ぶ	寧ろ 六ヶ敷しい 結ぶ
メ	めずらしい	珍しい	珍しい
モ	もうしこみ もえる もし もしくは もちいる もちろん もって	申し込み (申込み, 申込) 燃える もし 若しくは 用いる もちろん もって	燃る 若し 用る 勿論 以て

分類	用 語	使 う 字	使わない字 備考
モ	もつとも もつばら もどす もとに もとづく もの もる	最も 専ら 戻す(もどす) 下に 基づく もの 漏る	もつばら 許に 基く 物, 者
ヤ	やすい やはり やむをえず 止むを得ず やや やわらかい	やすい やはり やむを得ず やや 柔らかい	易い 矢張り 稍々 柔い, 軟かい
ユ	ゆえ ゆく	ゆえ 行く	故
ヨ	よい よいいに ようす ようだ(に) ようやく ようゆう よほど よる より	よい 容易に 様子 ようだ(に) ようやく →融解 よほど よる よる 比較するとき用いる. 例: ○○より△△が大きい	好い, 良い ようす 様だ(に) 漸く 熔融 余程 依る, 因る
ラ	ら	ら	等
リ	りゅうぶん りんぱ	留分 リンパ	溜分 淋巴, りんぱ
ロ	ろう ろうと ろかする	ろう 漏斗 ろ過する	蠟(正名はロウ)
ワ	わかる わかる わずかに わたって	わかる 分ける わずかに わたって	分る, 判る, 解る 分る 僅かに 互って

国立医薬品食品衛生研究所報告記載の手引き (単位, 記号, 略号)

1. SI 基本単位の名称と記号

量	単位の名称	単位の記号	量	単位の名称	単位の記号
長さ	メートル	m	熱力学温度	ケルビン	K
質量	キログラム	kg	物質	モル	mol
時間	秒	s	光度	カンデラ	cd
電流	アンペア	A			

従来用いられてきた重量はほぼ質量に置き換えられるが、当面は用語を併用できる。

2. SI 接頭語

SI 単位の10の整数乗倍を表すために、SI 接頭語が使われる。それらかの名称と記号は次のとおりである。

倍数	接頭語	記号	倍数	接頭語	記号
10	デカ (deca)	da	10 ⁻¹	デシ (deci)	d
10 ²	ヘクト (hecto)	h	10 ⁻²	センチ (centi)	c
10 ³	キロ (kilo)	k	10 ⁻³	ミリ (milli)	m
10 ⁶	メガ (mega)	M	10 ⁻⁶	マイクロ (micro)	μ
10 ⁹	ギガ (giga)	G	10 ⁻⁹	ナノ (nano)	n
10 ¹²	テラ (tera)	T	10 ⁻¹²	ピコ (pico)	p
10 ¹⁵	ペタ (peta)	P	10 ⁻¹⁵	フェムト (femto)	f
10 ¹⁸	エクサ (exa)	E	10 ⁻¹⁸	アト (atto)	a

例えば、長さの単位 m の10³倍はkm, 10⁻²倍はcm, 10⁻³倍はmm, 10⁻⁶倍はμm, 10⁻⁹倍はnmとなる。ただし、質量の単位の整数乗倍は、グラムに接頭語をつけて表示する。例えば、mgはμkgと記さない。

3. 特別の名称と記号を持つ SI 組立単位の例

量	単位の名称	単位の記号	量	単位の名称	単位の記号
周波数	ヘルツ	Hz	電気抵抗	オーム	Ω
力	ニュートン	N	コンダクタンス	ジーメンズ	S
圧力	パスカル	Pa	磁束	ウェーバ	W
エネルギー, 仕事, 熱量	ジュール	J	磁束密度	テスラ	T
仕事率, 電力	ワット	W	インダクタンス	ヘンリー	H
電荷	クーロン	C	セルシウス温度	セルシウス度	°C
電位	ボルト	V	平面角	ラジアン	rad
静電容量	ファラド	F	立体角	ステラジアン	sr
照度	ルクス	lx	光束	ルーメン	lm
吸収線量	グレイ	Gy	放射能	ベクレル	Bq
			線量当量	シーベルト	Sv

4. SI と併用される SI 以外の単位の例

量	単位の名称	単位の記号	量	単位の名称	単位の記号
時間	分	min	質量	トン	t
	時	h	圧力	バール	bar
	日	d	エネルギー	電子ボルト	eV
体積	リットル	l, L	平面角	度	°

また、圧力は SI 単位ではパスカルであるが、血圧等の体内圧力に関しては混乱を避けるため、mmHg を使用できる。

5. その他よく用いられる量と単位記号の例

面積	m ² , cm ²	体積	m ³ , cm ³ , l, ml	速さ	m/s
加速度	m/S ²	波数	cm ⁻¹	密度	kg/m ³ , g/cm ³ , g/ml
電流密度	A/m ²	磁場の強さ	A/m	モル濃度	mol/l
輝度	cd/m ²	粘度	Pa · s	動粘度	m ² /s
質量百分率	%	質量百万分率	ppm	質量十億分率	ppb
体積百分率	vol%	湿度百分率	%	回転速度	r/s
エンドトキシン単位	EU				

6. よく用いられる記号, 略号

融点	mp
分解点	mp (dec.)
沸点	bp
凝固点	fp
比重	<i>d</i>
屈折率	<i>n</i>
施光度	α
吸光度	<i>A</i>
水素イオン指数	pH
pK 値	p <i>K</i>

ミハエリス定数	<i>K_m</i>
Rf 値	<i>R_f</i>
保持時間	<i>tr</i>
50%致死量	LD ₅₀
50%有効量	ED ₅₀
経口投与	p.o.
静脈投与	i.v.
腹腔投与	i.p.
皮下投与	s.c.
筋肉投与	i.m.

標準偏差値	S.D.
標準誤差	S.E.
紫外吸収	UV
赤外吸収	IR
核磁気共鳴	NMR
電子スピン共鳴	ESR
施光分散	ORD
円偏光二色性	CD
マススペクトル	MS

編集後記

○初めて今期、衛研報告の編集委員をやらせていただきましたが、不慣れなことから関係者の方々には、ご迷惑をおかけしました。無事に衛研報告の編集作業が終わりまして、ほっとしております。研究所内では、さまざまな分野での研究が行われており、審査員の方々には、大変ご多忙のところ、気持ちよく引き受けていただきましてありがとうございます。(Y.K)

○編集後記ってあったんですね……ところで、ファルマシアの10月号の「学会誌のあり方について」と言う文章の中で、質の高い論文しか掲載しない一流誌根性は商業誌に任せ、学会誌はもっと間口を広くして研究の裾野を広げるのに寄与することを考えるべきだという意味のことが書かれてありました。衛研報告のあり方についてはいろいろご意見もあるようですが、レベルを高めるだけが能じゃないなーと言う気持ちを強くしました。(K.N)

○昨年の編集後記に、学生時代、当所の研究内容を知るために衛試報告(当時)に目を通したという記述があった。自分の過去も振り返りながら、そのような読者もいることを思い出した。これまで、外部読者の目を意識することはほとんどなかったが、少数ではあれ、衛研報告に真摯な思いで目を通す読者もいるはずである。衛研報告を手にする読者の目的は様々であろうが、「報告」としての基本は、所の研究活動を過不足なく誠実にまとめるところにあるのではないか、などと改めて考えさせられた次第である。(T.M)

○昨年に引き続いて2年目の編集委員ということもあり、衛研報告に愛着を感じるようになってきました。ところで、衛研報告の発行にあたって、執筆者や我々編集委員のように表に名前はないけれども、論文審査をお引き受け下さった方々の貢献は大きいと思います。審査員の先生方には、お忙しいところご協力頂きましてありがとうございました。(N.K)

○衛研報告の編集作業が終わりほっとしています。今年は、一部総説を担当させていただきましたが、昨年までに比べ、総説が増えたことは、仕事の流れを系統だてて知ることができること、また、衛研報告の啓蒙的部分の充実を図るという意味でよい方向と思われました。一部、投稿規定にあわない部分もみられましたので、この点が改善されれば、よりスムーズに審査がいくものと思われました。(R.T)

○昨年と比べれば発行日が幾分早くなりましたが、印刷業者との打合せが良くなかったこともあり、昨年同様、校正段階で不備が生じてしまい著者の方々及び図書委員の方々には大変ご迷惑をおかけしました。なかなか意志の統一を図るというのはむずかしいもので、自分はこう思って話したことが、相手には誤解され受取られことがしばしばあります。今後気を付けていきたいと思います。(S.K)

○今回初めて編集委員になり、誌上発表に掲載される原稿のチェックを担当しました。衛研報告には、様々な分野の研究内容が盛り込まれており、普段は読まない部分まで目を通す、よい機会になりました。ところで、衛研報告の最後に編集後記があることを、今まで知りませんでした。この場を借りて過去の編集委員の皆さんにお詫びします。でも、この文書読んでくださる方、どの程度いるのでしょうか？読んでないのは、私だけ？(H.K)

○著者も審査員も、長期出張や不在がちな人でなかなか連絡が取れず、気をもみました。それにしても本誌は、論文から、行政報告、標準品に関することまで「ごった煮」の感が強く、雑誌としての主旨、性格がアイマイ過ぎると思います。せめて、「分冊化」しないとと思っていた矢先、編集にたずさわって、執筆者もこのままでは書きにくいのだということが分かりました。(K.S)

○衛研報告編集委員の担当を命ぜられて、これまで不案内だった衛研内部の仕事が定年間近になって、ようやく分かってきました。もうすこし早く分かれば良かったのに――という後悔の念もあります。分かっていたから良かったのだという口の悪い人もいます。ともあれ、当所の研究のアウトラインを知りたい方は、ぜひ図書委員になられることをお勧めします。116号に関しては黒川センター長や佐竹部長をはじめ、多くの方が立派な原稿をおよせ戴き、恥ずかしくないものが出来たと関係各位に感謝しております。(M.M)

平成10年度図書委員

齋藤行生 神沼二真 *三瀬勝利 *香取典子
*川崎ナナ *小野景義 林 讓 内野正
松田りえ子 *久保田浩樹 末吉祥子 *手島玲子
*鈴木和博 宮原美知子 *川崎靖 *篠内桃子
渋谷淳 田辺秀之 *広瀬明彦 岩崎仁
*村井敏美 下村講一郎 *川島伸一

(*は編集委員)

国立医薬品食品衛生研究所報告 第116号

平成10年10月20日 印刷

平成10年10月30日 発行

発行所 国立医薬品食品衛生研究所化学物質情報部
東京都世田谷区上用賀1丁目18番1号

印刷所 株式会社ソーラン社
東京都中央区日本橋小伝馬町16-8